

スポーツ環境及び高校入試制度の在り方検証委員会 第5回会議（概要）

1 日 時 令和8年7月6日（月） 14：30～16：00

2 場 所 秋田県庁議会棟1階 大会議室

3 出席者 検証委員会委員 19名

4 議 題

- ・ 報告書の取りまとめに向けて

5 協議における委員からの主な意見

<論点1> 報告書（素案）の前半部分（アンケート結果や事実関係等の記載）について

（アンケート結果とデータの記載について）

- ・ アンケート結果において、進学先の選択で「部活動」を重視する割合や、「特待制度や遠征費などの経済的支援」を重視する割合に、県外進学者と県内進学者の間に大きな差が出ている。こうした特徴的な傾向を示すデータは報告書に明記すべきである。
- ・ 入試制度変更の経緯だけでなく、実際に県外へ進学している生徒が増加しているという事実を共有するため、県外への進学者数の推移等のデータも合わせて掲載すべきである。

（表現の修正について）

- ・ 「はじめに」の「中学生にとって」という限定的な表現は、学校教育全体を見据えて「学校は」あるいは「児童生徒にとって」という主語に修正すべきである。
- ・ 委員からの意見をまとめた部分に断定的な表現が見られる。全ての委員が合意した決定事項であるかのような誤解を与えないよう、あくまで「会議の中で出された意見」であることが分かる書きぶりに修正してほしい。
- ・ 公立高校において「合格の確約ができる」段階はそもそも存在しないため、「合格の確約ができない段階での過度な早期接触」という表現は誤解を招く恐れがあり、修正が必要である。
- ・ 生徒募集ルールについて「厳格に縛りすぎる」という表現は、これまで協議して決めたルールを守ってきた学校現場に対して強い表現である。表現を工夫してほしい。

<論点2> 報告書（素案）の後半部分（総括および今後の提言）について

（危機感の共有とスケジュール感について）

- ・ 提言の「即時着手すべき事項」という表現は、過度な期待感を生むため、「優先的に進める」など表現を変えた方がよい。
- ・ 「試験的に取り組めるもの」という表現は危機感に欠ける。「まずは早急に取り組むべきもの」や「課題解決の可能性のあるもの」として、迅速に実行に移す強い姿勢を示すべきである。
- ・ 「中長期的」という時間軸の表現は、一般的に5年や10年先といった認識になり、

「いずれやればいい」と計画倒れになる懸念があるので修正が必要である。

- ・ 子どもの1年はかけがえのないものであり、待ったなしである。良い方向に向かうよう、すぐに行動できることから改善を図っていくべきである。

(入試制度の在り方について)

- ・ 入試制度をメリットやデメリットで語るのではなく、「現行制度における教育的意義」として捉えるべきである。また、公立高校に「スポーツ推薦枠」というものは存在しないため、表現の修正が必要である。
- ・ 前期選抜が3月の一括実施となったことで、県外流出に対する堤防のような役割がなくなったとの認識がある。現行制度の在り方を再検討する必要がある。
- ・ 県外からの勧誘に対し、即座に検討し県外へ行く生徒（特定競技など）が増えている。そのような現状を踏まえて検討してほしい。
- ・ 保護者としては、入試が3月中旬まで決まらないのは日程的にタイトであり、心理的負担も大きい。大学入試でも年内決着が増える中、勉強が苦手な生徒でも他のことで頑張れる選択肢があってよいのではないか。
- ・ 自身の経験として、かつての前期選抜があったことで選択肢が広がり、先輩の声を聞いて意欲につながった。子ども自身が自分の目で見、肌で感じる機会が大事である。

(生徒募集の柔軟化と情報発信について)

- ・ 団体によっては、「勧誘」という言葉が禁止されているところもある。「募集」等に修正するなど、各競技団体の規定も踏まえて検討していく必要がある。
- ・ 体験入学の複数日設定は可能ではあるものの、学校の負担は大きい。
- ・ ルールを見直して「試験的に認める」とすると、ルールが緩くなると読まれかねない。なぜ現在のルールができたのかという過去の問題や経緯を踏まえ、慎重な言葉遣いやガイドライン作りが必要である。
- ・ 県外流出の歯止めや早期アプローチの仕組み化とともに、小中高と一貫した育成環境の整備を進めることが重要である。

(スポーツ環境の整備と充実について)

- ・ 指導者不足への対応や地域連携を推進する際、県が主導するだけでなく、どこが主体となって進めるのか（スポーツ協会など）を明確にし、踏み込んでほしい。
- ・ 少子化で生徒が減少する中、高体連としても合同部活動など様々な努力をしている。生徒や保護者から見て魅力を高められるよう、皆で一緒に取り組んでいきたい。
- ・ 「秋田でも全国を狙える」という表現は、インターハイ等を主眼とするように見えるため、吹奏楽などの文化部も含め「高い目標に挑戦する」といった、多様な生徒を包括できる表現に工夫してほしい。

<まとめ>

- ・ これまでの会議を通して、「今の秋田の状況に対して何かしなければならぬ」という危機感や共通認識を持てたことに大きな意義がある。
- ・ 今回の議論で出た意見や対応策を、報告書を出して終わりとするのではなく、次の具体的な動きへどのようにつなげていくか、報告書の中に盛り込んでいく。
- ・ 本日の意見を踏まえて修正した報告書案については、再度委員の皆様にご確認を依頼し追加の意見も踏まえながら、丁寧に最終報告書の作成に努める。